

〔論文〕

観光地の訪問意向と影響要因の比較論的考察

—大学生を対象としたアンケート調査の結果から—

山 本 真 嗣

名古屋学院大学外国語学部

要 旨

当研究では、名古屋市内と金沢市内の大学に通学する学生を対象としたアンケート調査をもとに、潜在的旅行者の訪問意向に影響を及ぼす因子について比較検討した。アンケート集計結果の相関分析等によって旅行予定者の訪問意向に影響を与える因子の析出を試みた。訪問意向の有無を尋ねる上での具体的な訪問先として能登地方を措定し、調査対象者それぞれの同地方への関心の度合いやエリア内の観光地をどの程度知っているかなどを尋ね、訪問意向との関連を調べた。結果として観光地の観光資源に熟知していることは、あまり訪問意向に影響を与えることはなく、「自然」、「観光」、「歴史」、「グルメ」、「温泉」等への関心の度合いの平均値が、調査結果においては訪問意向と最も高い相関を示す結果となった。

キーワード：観光行動，訪問意向，能登

A Comparative Study on Travelers' Intentions to Visit Sightseeing Areas and Its Factors

Masahide YAMAMOTO

Faculty of Foreign Studies
Nagoya Gakuin University

* 本研究はJSPS科研費15K01970の助成を受けた成果の一部である。

1. 課題と研究方法

(1) 課題設定

近年、地域経済活性化の取り組みの一方策として、地域の観光振興が熱い視線を集めてきており、観光産業の活性化がクローズアップされることが増えてきた。

しかしながら、一方で観光客を効果的に集客するための方法論については、まだ発展途上の段階にある。効果的かつ効率的な集客拡大のためには、旅行者が何に関心を示し、何によって観光地訪問というアクションが引き起こされるのか、旅行先の選択に影響を及ぼすファクターは何か、を探る必要がある。

当研究では、アンケート調査をもとに、潜在的旅行者の訪問意向に影響を及ぼす因子について検討した。人々が特定の観光地に訪れたいようになるためにはどういった条件が満たされなければならないのか、その手がかりを得ることを目指す。

(2) 研究方法

上述した課題を達成すべく、名古屋市内と金沢市内の大学に通学する学生を対象にアンケート調査を実施した。アンケートの集計結果をもとに、相関分析等によって旅行予定者の訪問意向に影響を与える因子を析出した。

訪問意向の有無を尋ねる上での具体的な訪問先として能登地方を措定し、調査対象者それぞれの同地方への関心の度合いやエリア内の観光地をどの程度知っているかなどを尋ね、訪問意向との関連を調べた。

2. 先行研究と調査

旅行先の選択に影響する要因についての先行

研究として、八城薫・小口孝司(2003)がある。八城らは、東京都内の大学に通う18歳から23歳までの女子大学生98名を対象として観光地選好に関するアンケート調査を行った。どのような観光地に行きたいかという各質問項目に「当てはまる」または「非常に当てはまる」と回答した人の割合を肯定率として集計した結果、最も肯定率が高かったのは、「温泉地があるところ」(86.7%)、「暖かいところ」(83.7%)、「海があるところ」(77.3%)などの自然環境に関する要素であった。また、人工的環境に関する要素としては、「遺跡があるところ」(68.4%)、「テーマパークがあるところ」(62.2%)、「史跡があるところ」(57.1%)などが高い肯定率となったという。

この調査結果は、対象が女子大学生に限定されているものの、訪問先における行動の選択肢の豊富さや観光資源・観光施設の集積が集客に有利となりうることを示唆しているものと考えられる。

内閣府が2003年におこなった世論調査によると、今後(1年くらいの間)、観光、レクリエーション、スポーツなどのために「国内旅行はしたいが、海外旅行はしたいとは思わない」、「国内旅行も海外旅行もしたい」と答えた者(1,570人)に、したいと思っている国内旅行の主な目的は何であるかを聞いたところ、上位は以下の結果となった(複数回答、上位4項目)。

「美しい自然・風景(山、川、滝、海、自然公園等)を見る」(65.0%)

「温泉での休養」(60.1%)

「旅行先の土地の郷土色豊かな料理等を食べる」(42.5%)

「史跡・文化財・博物館・美術館などを巡り鑑賞する」(34.8%)

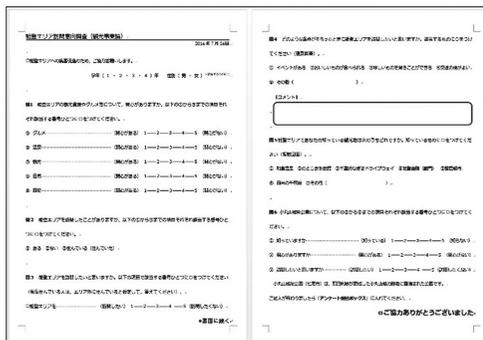
以上の結果から、旅行者が観光地を訪問する

際には、複数の目的に基づいていることが少なくなく、実際の行動も概ねそれに沿ったものであることが推察される。これらの研究および調査は、旅行者が訪問先の選定に関してどのような要素を考慮するのかを明らかにしたという点において、意義を認めることができる。しかし、それらの要素が旅行者の訪問意向にどの程度影響しているのかは、依然として不透明なままである。

3. アンケート調査の結果

(1) 調査方法

アンケート調査は、名古屋市内の大学で観光系科目を受講する学生を対象に、2015年7月15、17日と12月22日に実施した。実施日のべ出席者数187名に対して、回答者数は135名（男性45名、女性89名、不明1名）であった。質問は6つの項目からなっており、無記名とした。同様の調査を金沢市内の大学に通学する学生に対しても実施¹⁾し、両者の結果を比較検討することとした。



(2) 質問項目と回答結果

第1の質問は、能登エリアの観光資源やグルメ等についての関心を問うもので、「関心がない」は1、「ある」を5、の5段階とした。図-1は、

全回答の平均をプロットしたものである。

設定した5項目のうち、比較的グルメや温泉などの旅の楽しみに関する部分に対する関心が高く、歴史のような比較的教養に関わるキーワードへの反応が鈍かったことが見て取れる。金沢の調査においても同様の傾向が示された²⁾。

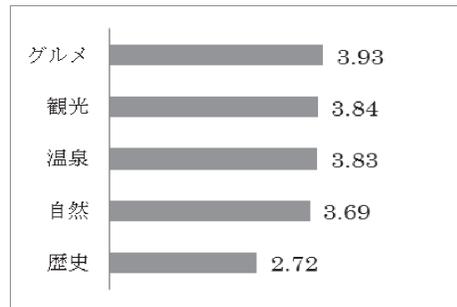


図-1 能登エリアの観光資源等への関心

第2の質問では、能登エリアを訪問したことがあるかどうか、あるいは住んでいたかどうかを尋ねた。それによると約86%の学生(116名)が、能登エリアを訪問したことがないと回答した(「ある」は13%)。なお、ここでいう「能登エリア」とは、石川県内における宝達志水町から北の地域を指しており、かほく市、内灘町、津幡町、氷見市は含まないこととした。

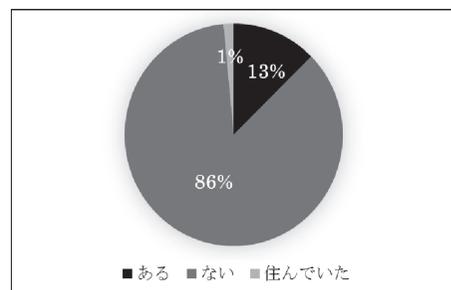


図-2 能登エリア訪問(居住)の有無

次に、能登エリアを訪問したいかどうかについて、「訪問したくない」を1、「したい」は5、の5段階で記入を求めた。平均値は3.5と、

金沢の学生(2.27)と比べてより強い訪問意向を有していることを示した。金沢の学生は約67%が能登地方の訪問経験があり、同エリアに関してあまり新鮮味が感じられなかったのではないかと推測される。

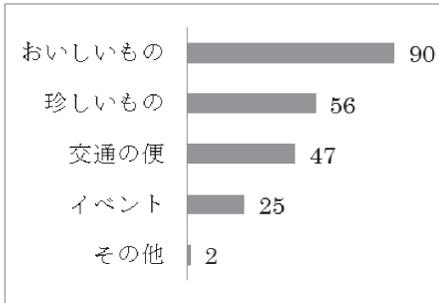


図-3 能登エリア訪問の条件

第4の質問は、どのような条件がそろったときに能登エリアを訪問したいと思うかを、以下の選択肢から複数回答で答えてもらった(図-3)。第1の質問でグルメに対する関心が示されていたことを反映してか、②を選ぶ回答者が多く、次いで③との結果を得た。

- ① イベントがある

- ② おいしいものが食べられる
- ③ 珍しいものを見ることができる
- ④ 交通の便がよい
- ⑤ その他

第5の質問では、能登エリアで知っている観光地を複数回答で挙げてもらった。最も多かったのは和倉温泉で、次いでのとじま水族館、千里浜なぎさドライブウェイ、輪島の朝市が続いた(図-4)。金沢の調査と比べると、名古屋ではマークされた観光地の数が少なく全体的に認知度が低いことを示す結果となった。

最後の質問は、前田利家が築城した小丸山城の跡地に整備された公園である、小丸山城址公園(七尾市)について尋ねた。公園の認知度については、「知らない」を1、「知っている」は5、関心の度合いは、「関心がない」を1、「関心がある」は5、訪問意向は、「訪問したくない」を1、「訪問したい」は5、の5段階とした。

それぞれの平均値をとると、まず名古屋の学生の「知っている」は1.26、「関心がある」は2.4、「訪問したい」は2.64という結果となった。一方で金沢の学生は「知っている」が1.75、「関

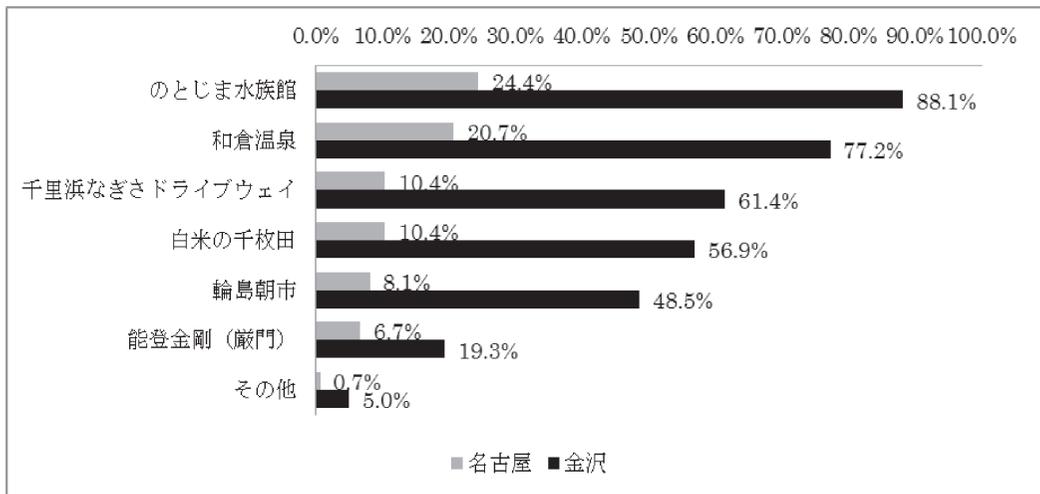


図-4 能登エリアで知っている観光地

表-1 能登エリアの訪問意向との相関①

		訪問 したい	グルメ	温泉	観光	自然	歴史
訪問したい	Pearsonの相関係数	1	.338**	.365**	.429**	.310**	.263**
	有意確率(両側)		.000	.000	.000	.000	.002
	度数	133	133	133	133	133	133
グルメ	Pearsonの相関係数	.338**	1	.507**	.466**	.378**	.289**
	有意確率(両側)	.000		.000	.000	.000	.001
	度数	133	135	135	135	135	135
温泉	Pearsonの相関係数	.365**	.507**	1	.583**	.583**	.268**
	有意確率(両側)	.000	.000		.000	.000	.002
	度数	133	135	135	135	135	135
観光	Pearsonの相関係数	.429**	.466**	.583**	1	.721**	.452**
	有意確率(両側)	.000	.000	.000		.000	.000
	度数	133	135	135	135	135	135
自然	Pearsonの相関係数	.310**	.378**	.583**	.721**	1	.469**
	有意確率(両側)	.000	.000	.000	.000		.000
	度数	133	135	135	135	135	135
歴史	Pearsonの相関係数	.263**	.289**	.268**	.452**	.469**	1
	有意確率(両側)	.002	.001	.002	.000	.000	
	度数	133	135	135	135	135	135

**相関係数は1%水準で有意(両側)。

心がある」は2.29,「訪問したい」は2.51とどちらも認知度と関心,訪問意向それぞれ低い値を示した。

4. 考察

(1) アンケート結果から

表-1は,前節の質問1で示された関心の度合いと回答者(名古屋の学生)の訪問意向との相関係数をとったものである。これらのうちで最も高い値を示したのが「観光」の0.429であった。

金沢の学生は,高い順にまず「自然」が0.479,次いで「観光」の0.433,「歴史」(0.342),「グルメ」(0.329),「温泉」(0.312)の順となった。地元の学生を対象とした調査において「自然」が最も大きな値を示したのは,のとじま水族館

の認知度が高かった(88.1%)ことによる影響が考えられる。

これらの各キーワードで示された関心の度合いの平均値,さらに能登エリアで知っている観光地の数と訪問意向との相関係数をとったのが,表-2である。関心の度合いの平均値との相関係数は,0.447(金沢の学生は0.528)といずれの調査も平均値が他の5つのキーワード全てを上回った。

一方で,知っている観光地の数は0.238(金沢の学生は0.154)とあまり訪問意向との相関を見出すことはできなかった。

本来,訪問意向が高ければそれだけ観光地に詳しくなるはずであるが,逆によく知らないことで好奇心を刺激されるという側面も否定しがたい。名古屋の学生の方が若干高い値となって

いる点は、能登から比較的遠いことが影響した可能性がある。つまり、能登に近い金沢の学生は実際に現地を何度か訪れたことによって「飽き」が出てきた可能性も考えられる。訪問することで「また訪れたい」と再訪につながる場合もあれば、観光地によっては「一度訪問すれば十分」となる場合もあり、現地の観光事情に通じていることが、必ずしも訪問意向にプラスに作用するとは限らないといえる。

最後に、七尾市にある小丸山城址公園の訪問意向（または関心）と歴史への関心との相関について検討した（同公園については認知度がきわめて低いことが予想されたため、訪問意向や関心の有無を尋ねるに当たり調査用紙に公園についての簡単な説明を付記した）。

まず名古屋の大学生の「歴史」および小丸山城址公園への関心の相関³⁾は0.420と「観光」(0.441)を下回った(表-3)。「歴史」への関心と小丸山城址公園の訪問意向の相関⁴⁾は0.365と、同様に「観光」(0.427)を下回っており、少なくとも名古屋の学生に対しては歴史的価値をアピールするよりも観光資源としての魅力を訴えた方が得策かも知れない。

(2) 観光資源の集積

「自然」、「観光」、「歴史」、「グルメ」、「温泉」それぞれに一定以上の関心を示すほど、訪問意向も高くなるということは、旅行者に対して、これらの面でそれぞれある程度の魅力を提示できるかどうか重要であると考えられる。つまり、多様な観光資源が集積していることが観光客の訪問意向喚起に有利となり、観光地への集客効果も期待できるといえる。

観光資源・施設で過ごす時間に限界代替率逓減の法則を仮定すると、観光客が複数の観光資源・施設を含む観光地を訪れた場合の効用関数Uは、図-5のように表すことができる⁵⁾。

$$U = f(x, y, z)$$

x, y, z: 観光資源・施設X, Y, Zで消費した時間

旅行者が時間的制約T(図中の三角形の部分)に直面しつつ効用を最大化する時間配分は、原点に対して凸型の効用関数 $U = f(x, y, z)$ とTとの接点となる。つまり、旅行者は可能な限りX, Y, Zにそれぞれ一定の時間を割り当てることが望ましいといえる。

ここで、旅行者が滞在先で複数の観光資源を

表-2 能登エリアの訪問意向との相関②

		訪問したい	関心の度合い (平均値)	知っている 観光地の数
訪問したい	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) 度数	1 133	.447** .000 133	.238 .006 133
関心の度合い (平均値)	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) 度数	.447** .000 133	1 135	.321** .000 135
知っている 観光地の数	Pearsonの相関係数 有意確率(両側) 度数	.238 .006 133	.321** .000 135	1 135

**相関係数は1%水準で有意(両側)。

表-3 小丸山城址公園の訪問意向との相関

		グルメ	温泉	観光	自然	歴史	関心がある	訪問したい
グルメ	Pearsonの相関係数	1	.507**	.466**	.378**	.289**	.182**	.197*
	有意確率(両側)		0	0	0	0.001	0.037	0.024
	度数	135	135	135	135	135	131	131
温泉	Pearsonの相関係数	.507**	1	.583**	.583**	.268**	.320**	.288**
	有意確率(両側)	0		0	0	0.002	0	0.001
	度数	135	135	135	135	135	131	131
観光	Pearsonの相関係数	.466**	.583**	1	.721**	.452**	.441**	.427**
	有意確率(両側)	0	0		0	0	0	0
	度数	135	135	135	135	135	131	131
自然	Pearsonの相関係数	.378**	.583**	.721**	1	.469**	.364**	.338**
	有意確率(両側)	0	0	0		0	0	0
	度数	135	135	135	135	135	131	131
歴史	Pearsonの相関係数	.289**	.268**	.452**	.469**	1	.420**	.365**
	有意確率(両側)	0.001	0.002	0	0		0	0
	度数	135	135	135	135	135	131	131
関心がある	Pearsonの相関係数	.182*	.320**	.441**	.364**	.420**	1	.813**
	有意確率(両側)	0.037	0	0	0	0		0
	度数	131	131	131	131	131	131	131
訪問したい	Pearsonの相関係数	.197*	.288**	.427**	.338**	.365**	.813**	1
	有意確率(両側)	0.024	0.001	0	0	0	0	
	度数	131	131	131	131	131	131	131

** 相関係数は1%水準で有意(両側)。

* 相関係数は5%水準で有意(両側)です。

訪問することを選択しないケースについて検討する。先ほど限界代替率低減を仮定したが、もし観光資源XとYおよびZが訪問目的において完全代替的、すなわち限界代替率が常に一定となる場合、その効用を最大化する均衡点は縦軸あるいは横軸上に位置すると考えられる。このケースにおいて、旅行者にとっては観光資源が複数あっても集積のメリットを直接的には享受できないことを意味する。

このことから、旅行者にとっては、旅先の観光資源が豊富であったとしても、それらが互いに代替的である場合、あまり意味をなさない

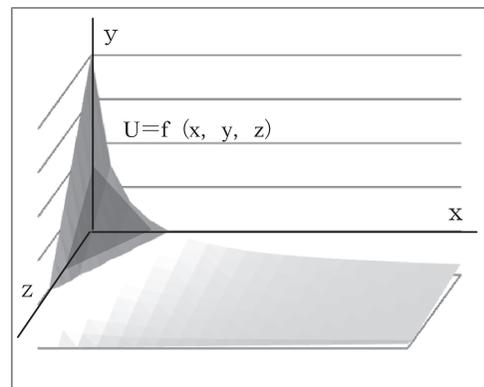


図-5 観光客の効用(観光資源3ヶ所の場合)

いってよい。換言すれば、観光資源の集積が旅行者にメリットを提示し、集客効果を発揮するには、それぞれの観光資源が互いに一定の補完性を有している必要がある。この「補完性」が、具体的に何を指すかが問題であるが、観光客にそこに「行く」というアクションを起こさせる「目的」(消費, 体験, 休養, 学習など)の多様性ということができるとはのではないか。仮にそうであるとすると、旅行者の様々な目的が充足できるようにバランスよく観光資源が賦存していることが、その集積のメリットを生み出す条件の1つとなると考えられる。例えば京都などは、もともと寺社や博物館等の魅力ある観光資源が一定以上集積しており、国内の他の観光地に対して優位であるが、京料理など観光行動の選択肢も豊富であることで、より有利となっていると考えられる。

先のアンケート調査の結果から、潜在的旅行者の訪問意向には、現地の観光事情に通じていることよりも総合的な関心の度合いの影響が大きいことが示唆された。観光地サイドとしては、こうした多様な関心に対応できるようなメニューを揃えることによって、当該地域への集客促進が実現できるかも知れない。とはいえ、安易にそのような方向性を志向することは、総花的で独自の魅力に乏しい観光地の形成につながりかねない。他の観光地との差別化とのバランスを保つことが求められる。

5. 今後の課題

当研究では、学生を対象としたアンケート調査の結果をもとに、相関分析等によって旅行(予定)者の訪問意向に影響を与える因子について検討した。結果として観光地の観光資源に熟知していることは、あまり訪問意向に影響を与え

ることはなく、「自然」、「観光」、「歴史」、「グルメ」、「温泉」等への関心の度合いの平均値が、調査結果においては訪問意向と最も高い相関を示す結果となった。小丸山城址公園の訪問意向は、観光および歴史への関心との相関が比較的高かった。

しかしながら、調査対象が学生であること、具体的訪問先として能登エリアを指定したことなど、調査手法に伴う限界もあることは、否定できない。また、一般的には、周遊型の観光を志向する観光客は、観光資源の集積した観光地を愛好すると考えられるが、滞在型を好む観光客のそれは異なる可能性がある。今後は、周遊型と滞在型の違いにも着目して考察を深めたい。

注

- 1) 金沢市内の大学に通学する学生を対象としたアンケート調査は、2014年7月22～24日に実施した。実施日のべ出席者数272名に対して、回答者数は202名(男性70名, 女性131名, 不明1名)であった。
- 2) 金沢の学生を対象とした調査の結果は、高い順に「温泉」(4.04), 「グルメ」(4.01), 「観光」(3.71), 「自然」(3.54), 「歴史」(2.73)であった。温泉が最も高い値となった理由としては、地元であるがゆえに和倉温泉の認知度が高かったことが影響したと考えられる。
- 3) 金沢の学生の「歴史」と「小丸山城址公園への関心」の相関は0.427他のキーワードとの相関係数は、「グルメ」(0.137), 「温泉」(0.183), 「観光」(0.213), 「自然」(0.358)であった。
- 4) 同様に、金沢の学生の「歴史」と「小丸山城址公園への訪問意向」の相関は0.430で、他は「グルメ」(0.216), 「温泉」(0.253), 「観光」(0.251), 「自然」(0.390)。
- 5) ここでは、観光資源・施設X, Y, Z間の移動時間をゼロとしている。現実にはそのように複数

観光地の訪問意向と影響要因の比較論的考察

の観光資源・施設が隣接していることは寧ろ例外的であるが、単純化のためにそう仮定した。

【参考文献】

八城薫・小口孝司（2003）：観光地選好に及ぼす個

人的原風景と心理学的個人差，観光研究，vol. 15(1)，pp. 28-29

内閣府（2003）：「自由時間と観光に関する世論調査」

橋本俊哉（2013）：観光回遊行動（橋本俊哉「観光行動論」原書房），制度，東京大学出版会，pp. 105-119

